

くらしの中で読む 『正法眼蔵』

おうさくせんだば
王索仙陀婆の巻

その一

成興寺住職 小倉玄照

私は今、中国山脈の分水嶺にある過疎の山村に生活しています。人口は、六千人少々。面積は、岡山県では一番広い町ですから、つまりは、山林ばかりの町と申してよいでしょう。

私の寺は、その町の中心地にあります。檀家は百軒たらず。とても、妻子を養いきれるような寺ではありません。

先代の住職は、私の実父ですが、農地解放で失った百俵の年貢米を何とかカバーしなければ

ば、子弟の教育もままならぬ——と、地の利を活かして境内に保育園を開設しました。昭和二十三年のことです。農村には、子供がいっぱいいました。何しろ、私の町の当時の人口は、優に一万人を越えていたのです。

保育園の経営にも紆余曲折うよきよくせつがありました。しかし、先任亡き後は、私と家内でその経営を引き継いで、今も悪戦苦闘しています。時々、禅寺の和尚なのか、保育園の園長なのか、どっち

が本務なのか、自分でもわからなくなるような日常を送っているわけです。

それでも、道元禪師の教えというのは、そんな俗情ふんぷんとした生活をしている私どものバックボーンになっています。中々じつくりと机に向かう閑暇もないのですが、折々に『正法眼蔵』を繙きなながら、子育ての原点を考えてみたり、太平の世の行く末を案じたりするのです。

まことに気ままな『正法眼蔵』の読み方です。出家に徹し、只管打坐の生涯を送られた道元禪師の生き方を偲ぶ時、誤読のおそれが多分にあるような不遜な『正法眼蔵』に対する接し方です。しかし、あまりに観念的というか、高踏的というか、生活からかけ離れた眼蔵解釈があふれている現代の状況を思う時、何とか田舎和尚が一石を投じてみたいという気にもなるのです。

さて、題して「くらしの中で読む『正法眼蔵』」。

何の巻から始めるか。これも私の気分のままに「王索仙陀婆」。

あまりなじみのない巻かもしれません。奥書には、寛元三年（一二四五）十月二十三日、越前の大仏寺にありて衆に示す、とあります。翌寛元四年には、大仏寺は、永平寺と名を改めます。そういう意味では、道元禪師にとって一つの節目となった巻と言えます。

ともあれ、早速に拝読して参りましょう。

仙陀婆とは何か

〈本文〉

有句無句、如藤如樹、餺飩餺馬、透水透雲、すでに恁麼なるゆるに。

大般涅槃經中、世尊道、譬へば、大王の諸群臣に、仙陀婆来と告ぐるが如し。仙陀婆とは、一名にして四実あり。一には塩、二には器、三には水、四には馬。是の如くの四物、共に同じ



く一名なり。有智の臣は、善くこの名を知る。

もし王、洗ふの時に索仙陀婆すれば、すなはち

水を奉る。もし王、食する時に索仙陀婆すれば、

すなはち塩を奉る。食し已りて漿を飲まんと欲

ふ時、索仙陀婆すれば、すなはち器を奉る。も

し王、遊ばんと欲ひ、索仙陀婆すればすなはち

馬を奉る。是の如く智臣、善く大王の四種の密

語を解す。」

この王索仙陀婆、ならびに臣奉仙陀婆、きたれることひさし、法服とおなじくつたはれり。

世尊すでにまぬかれず拳拈したまふゆゑに、児

孫しげく拳拈せり。疑著すらくは、世尊と同参

したれるは、仙陀婆を履踐とせり。世尊と不同参

ならば、更買草鞋一行脚 進一步 始得。

すでに仏祖屋裏の仙陀婆ひそかに漏泄して、大

王家裏に仙陀婆あり。」

△現代語私訳▽

「言葉で有といひ無というが、それは藤のご

とく樹のごとくというようなものか。驢馬を飼

い、馬にえさくらわすは、水を透かしてみたり

雲を透かしてみようなものか。」

すでにこのように言葉と実態はなかなかぴたりとつかないからであろうか、『大般涅槃經』の中で、世尊も仰せになっている。

「たとえば、大王が並びいる臣たちに、仙陀婆を持って」と告げるようなものである。仙陀婆というのは、一つの名称に四種の実態を秘めているのである。一つには塩、二つには器、三つには水、四つには馬である。このような四つのものが、みな同じ一つの名称なのである。智慧のある臣は、よくこの区別がつくのである。もし王が顔や手を洗いたい時に、仙陀婆を持ってと命ずれば、すぐに水をさしあげる。もし王が食事のおり仙陀婆を求むれば、すぐさま塩を用意する。もし王が食事をすまし、飲みものをめしあがろうとするときに、仙陀婆を持って、と言えば、すぐに器をたてまつる。もし王がどこかへ出かけようとするときに、仙陀婆を、と求め

るならば、即座に馬の準備をする。このように智慧ある臣は、大王のことにばに秘められた四種類の内容をよく聞きわけるのである。」

この、王が仙陀婆を索め、臣が仙陀婆を奉るという故事は、ずっと昔から、法服とともに伝えられているのである。世尊がすでにさけることなくそれを取りあげ問題として語っているのだから、その流れを汲む法孫もまたしばしばそれをとりあげ問題としている。そこでいささか思案してみるに、世尊を慕い、世尊の教えのまに修行して来た者たちはみな、この仙陀婆の消息を臍おちすべく修行して来たのである。もし世尊とは異なる修行をするというのならば、さらに草鞋を買って行脚に出発し、一步を進めてみよ、そのことがはじめて臍おちするだろう。そういう意味からするなら、もともとは仏祖の道場で大切にされていた仙陀婆が、いつのまにか俗界に漏れ伝えられて大王の宮廷に仙陀婆の

語があるという事態になったとも言えるのである。

ことばと事物

保育園は、○才児から小学校入学までの幅広い年齢層の子どもを預かっています。まだ這い這いも出来ない児が、よちよち歩き始め、やがてことばをしゃべるようになる——その成長の過程をつぶさに観察できる立場に私どもはいるわけです。

乳児から幼児へと、子どもが成長していく中で、現代の親たちが一番感心を抱いているのは、ことばの問題。もし同年令の子どもが、かたことをしゃべっているのに、我が子が言葉らしきものを少しも発しない場合の親の心配は、想像を絶します。もしかすると脳に微細な傷でもありはしないか、と大病院に脳波を調べに行った親も珍しくはありません。

我が子が文字を読んだり書いたりし始めた時の親の喜びも大変なようです。もちろん、親はそのために幼い時から絵本を与えたり、ドリルを与えたり、はたから見ているとおかしいほどの気配りをします。

私どもが幼かった頃は、文字や数字に対してもっとおおらかであったように記憶します。小学校に入学して、初めてカタカナを読み、数字を習う者が殆んどだったので。

おかしな現象です。たしかに『新約聖書』ヨハネ伝の冒頭には

「始めにことばがあった。ことばは神と共にあった。ことばは神であった。」

とあります。しかし、これは造物主によって天地が創造されたとするキリスト教特有の考え方と申した方がよいでしょう。なぜならことば（概念）に合わせて万物が造られたとすれば、ことばは存在の根拠と言えるものになるからで



す。

仏教では、造物主を説きません。森羅万象は、何物かによって造られたものではなくてそこにそのまま存在していたのです。その一々に名称を付したのは人間です。存在があつて、しかる後、ことばが生まれたのです。仏教的世界観からすれば、ことばはなくても萬物は存在し得るのです。むしろ、なまじことばを修得したばかりに、私も人間は、抽象的な言葉の世界と、現実の具体的世界との分裂に苦しまなければならぬようなはめに陥つてしまったとするのが仏教的な考え方です。

発達した機械文明と分業による大量生産が社会に定着したため、私どもはおしなべて生活体験の幅が狭くなりました。ところが、情報化社会と言われるほどですから、言葉だけは結構豊かなのです。テレビやラジオ等によって、体験の裏づけのない語彙をあたかも自らが体験の中

から身につけたと錯覚しつつどんどん修得しているからです。

有句無句と恁麼

「王素仙陀婆」巻は、ことばと行動の問題にからみながら、人と人とのコミュニケーションの理想的ありようを語っている巻だと申してよいでしょう。

まず、冒頭のこの一節は、「王素仙陀婆」という珍しいことばの意味する内容を明らかにしています。それは、『大般涅槃經』巻九、如来性品に説く譬喩ひよが出典の語だとした上で、仙陀婆(Saindhava)という一つの語に、四種の意味を内包した語を自由自在に聞きわかる臣のことを語りつつ、仏道修行が抽象的な概念によって振りまわされるものであつてはならないことを強調しています。

冒頭の「有句無句」は、四句分別のことを端

的に表現しています。存在物を四種に分けて考察することが仏教では古くから行われていたのです。例えば、「有である」（肯定）「無である」（否定）「有であって無である」（複肯定）「有でもなく無でもない」（複否定）という四句の命題を立てて考えてみるわけです。つまり、ここでは四句の内、「有句無句」という最初の二つの命題を示すことによって、存在物のあらゆるありようを問題にしていると考えてよいでしょう。抽象的に「有」とか「無」とか論じてみても、結局、存在は「藤」だとか「樹」だとかいう具体的なものから離れてはありえないのだ、ということなのです。

また、驢馬を飼ったり、馬に餌をやったりという具体的な行為と、水を透かしてみたり、雲を透かしてみるといふかなり抽象度の高い行為とは、深く関わっているといふのです。

「恚塵」という語は、禪門で好んで使われる

のですが、これは、ことばが具体から遊離して概念化してしまうのを嫌うからです。「恚塵」は、中国は唐代・宋代の俗語です。その、この、そんな、こんな、このように、等という意味です。一緒に行動している時に、「それ」とか「これ」とか言えば、すぐに通じます。しかし、文字にして「これ」とか「それ」とか記すと中々わからなくなってしまう。『正法眼蔵』の中にも「恚塵」の語はしばしば出て来ます。その都度、私どもがチンプンカンプンになるのは、私どもが頭の中で、抽象的に道元禪師の言われるところを理解しようとするからなのです。

言葉と万物の実態が中々ぴたりと一致しない、むしろ両者はとかくすると遊離していつてしまう——そのことに対する道元禪師の危機感を「恚塵」という語によって示そうとされているのだと受けとめたらまず間違いないところだと私は思っています。（この項つづく）